PACK 京都大学学士山岳会 No.7

Newsletter NOV. 1997

梅里雪山の失敗

なぜサイクロンの影におびえたのか

平井一正編

前にニュースレター第4号に、「梅里雪山登山の失敗に思う」と題して私の感想をのべた。その中で、会員である筑波大学の安成哲三（文中敬称略）からベンガル湾に発生したサイクロンが北上し、大雪のおそれありとの緊急予報がBCに入った、この予報にもとづいて上部の隊員がBCにおりて、結局登山は失敗した、とのくだりがある。これはその前に行われた登山隊報告会（九七・一・一五）で論議されたことを受けて書いたものである。

このまま私の記事を素直に読むと、どうも安成の予報が、登山失敗の大きな引き金になったような印象を受ける。その後、森本を通じて、安成から、彼がどのような判断にもとづいて情報を送ったかの実態をあきらかにしたい、との意向が伝えられた。私も情報の伝達による歪みについては興味があるので、ここで安成が現地に送ったファックス、日本気象協会からのファックス、関係者の意見などを掲載して、どうして現地がこの予報によって揺れ動いたかを考えたい。

一．筑波大学安成哲三からのファックス

「緊急　1996.12.2. 14:37

大量の貴重な気象観測報告をありがとうございました。非常に参考になります。

さて予想ですが、チベット西方の寒気塊の動きがあやしくなってきました。またGMS画像には、ベンガル湾上にサイクロンが発達北上しています。この両方がもし連動すれば、昨年一一月のネパール大雪雪崩のケースに近いことが、ヒマラヤ東部ー雲南で起こる可能性があります。

多分四～六日頃が山場になると思いますので、十分にこの二つの動きに注目してください。チベット西方の寒気塊がヒマラヤ山脈西端にひっかかった二日後位か。梅里付近で最も警戒すべき時期かと思います。」

これが問題のファックスであるが、よく読めばわかるように、サイクロンの動きに注意せよということだけで、必ず大雪になるとは言っていない。普通の天気予報である。

さらに安成からは天気図と一緒につぎのようなファックスも来ている。

「12.3. 20:26

梅里のデータなど、たしかに受け取りました。気象庁数値や報告の96HOURまでのグローバル予報天気図を見ました。

チベットの西の寒気はより北の大きなトラフにつながっているようです。たしかにサイクロンは予報では五日一二時頃には消滅するようにでているのですが、四日一二時頃からチベット北の大きなトラフからの寒気が高原東縁を回り込んで雲南に流れこむように出ています。それとサイクロンくずれの水蒸気流入で、どれだけ崩れますかが、かぎです。いずれにしても山場はやはり四日～六日で、これを越せば、天気は確実に良くなると判断します。あとは現地の判断をお願いいたします。皆様のご健闘と安全をお祈り致します。」

このファックスの存在は、今回はじめて明らかになったが、それによると四日～六日を越せば、好天が予想されている。ただ発信の時間をみると、すでに下山のあとであり、BCの決定に影響を与えていないのは、残念である。しかし最初のファックスを読んでも分かるように、そんなに危機感があるようには思えない。なぜ、もう少し上部でがんばろうという意見がでなかったのか、理解に苦しむ。

二．日本気象協会気象情報部島田さんからのファックス

「1996.12.2. JMT16:00

1．梅里雪山付近はひきつづき五〇〇ＨＰＡの強風軸付近にあり、頂上では三〇Ｍ／Ｓの強風だが、天気は安定していると思われる。

2．三日～四日と五日～六日のトラフが通過、山系南側で組織的な上昇流の発生が考えられる。このため、ベンガル湾に存在する熱帯低気圧からの暖湿気が流入するおそれがある。しかし、ひまわり画像からみると、熱帯低気圧はゆっくり西進中で北上する様子はなく、梅里雪山付近に向かって吹き出す雲はうすい上層雲だけである。明日以降の熱帯低気圧の動きに注意したい。」

三．気象協会の情報処理部長である会員森本陸世の意見

一九九六年一二月二日の気象情報の経緯について

一二月二日の一九時頃（時間は正確ではないが一七時三〇分以降であることは確か）にＡＡＣＫの高村会長から、サイクロンが近づいており、危険だという情報が日本から現地に入ったが、どのような様子なのかという問い合わせがあった。私もそろそろ登頂時期なので、二日の昼ごろひまわりの画像を気にして見ていたが、サイクロンがベンガル湾にあるものの、ゆっくり東進しているようなので、アタック時期にはおおきな影響は当面ないと考えており、その旨を伝えた。また私の所属する日本気象協会の気象情報部から当日送信したファックスを取り寄せ、内容を確認したが、サイクロンの今後の動きに注目するようにという記述があるのみであった。

再度ＡＡＣＫに電話し、木村氏に私の感想と、予報担当部局がだした内容を連絡した。木村氏との間で、いずれにせよ、現地にＮＯＡの受信や他の気象情報が入っているはずなので、それらを見ても、サイクロンの動きや梅里雪山周辺の雲の状況は把握できるはずであり、現地判断に任せてよいのではないかと話したように記憶している。そのとき、安成氏からの情報とわかったので、判断の根拠が気になり、筑波大に連絡したが、不在で連絡はとれなかった。

四．現地の判断

以下は福崎のメイルから。

一二月二日のファックスでは一二月四日から六日まで要注意というものです。一二月三日のファックスでは現地判断を強調しており、安成さんがむやみに危機をあおったとは思えません。

一方気象協会からのファックスは、熱帯低気圧の動きに注意するようにというものです。ただし南からの暖湿流に注意するよう書いてあります。これも熱帯低気圧の影響です。（熱帯低気圧＝サイクロンです）

また雲南省気象台及び北京の気象台より一二月四日から六日を含む一週間ぐらいの間に大雪の恐れがあるとの予報が出ていました。

安成さんのファックスを一二月二日現地で受け取ったのが、一三：三〇ぐらい？でした。現地での気象は強風で晴れ、ときどき雪が舞うというものでした。高層の雲の流れも早かったです。対応としてはすぐに、四日から六日の悪天のくる前にアタックをかけるという意見がすぐに出ました。私の直後の判断は、様子を見ようというものでしたが、上部が疲れていることもあって、安全策としていったん下山しようという意見が出て揺れました。

とりあえず、上部には安成さんのファックスの内容を伝えました。Ｙさん、倉智さんはすぐ下山には反対のようでした。しかし晩の一八：〇〇からの交信で、一時下山が初めに出されたためそうなりました。

しかしこの経過は微妙なので、また詳しく書きます。

私としては、安成さんが危機をあおったのではなく、いわゆる普通の気象予報をしたと思います。現在の気象学の発達により、大きな悪天の予想もできるようになったと思っています。

前回の隊の遭難でナーヴァスになっていることも事実であり、最大限の安全をとることも一つの方法だと思います。その後の経過はまた別問題だと思っています。

五．弱気が増幅された？

一月に行われた報告会では、言葉の省略もあって、安成の天気予報がかなり信頼できるもので、大雪の降るおそれがあるという警報であったような印象を、ほとんどの参加者が持ったことはたしかである。しかし、福崎も書いているように、安成のファックスは単なる天気予報で、いたずらに危機感をあおったものではないことが明らかになった。前回のニュースレターの私の記事で会員が誤解を持たれたとしたら、それは私の責任でもあり、ここに深くお詫びしたい。

しかしそれでは一体なぜ、いったんＢＣまでおりようという話になったのか、いささか理解に苦

しむところである。まず、BCから上部テントに予報を知らせるときに、一字一句を知らせるわけでもないので、当然語句の省略がある。この省略された部分がかなり重要な意味をもつと思う。BCしか安成のファックスの全文を知らないので、よく予報を吟味した上で、ある程度BCで判断した上で、指令を上部に知らせるべきであった。

前回の遭難で皆がナーヴァスになっているところに、大雪という言葉が飛び込み、過度に反応したと思われる。ただ言えることは、いろいろと情報の伝達に問題があったかもしれないが、やはり上のテントの連中のたたかう姿勢に欠けるものがあったのが、サイクロンの影におびえた最大の原因であろう。少しの弱気が、この「予報」で増幅されてしまった。残念でならない。

六、安成哲三のメモ

次に、梅里雪山の天気予報について安成が書いたメモをそのままのせる。

今回の私自身の梅里での気象予報（予想）では、これまでの私のネパールヒマラヤや雲南地域の冬の大雪や寒波に関する多少の経験と気象解析の結果から、チベット高原のすぐ西、中央アジア、パミール高原付近から、ヒマラヤ主脈の南面からインド平原部まで南下する寒気団に最も注目しております。

この付近で大きく南下した寒気団（気圧の谷）により、ヒマラヤ主脈とチベット高原の地形による気象力学的効果で、主脈沿いに局所的な低気圧が急速に発達し、早いスピードで東進するケースの多いことが、私たちの解析で明らかになっています。（安成・藤井、1983、Yasunari and Tien, 1989、安成他、1996など）。

九一年一月の梅里遭難時も、まさにこの状況でした。九五年一〇月のネパールでの大雪、雪崩の場合は、これにベンガル湾からのサイクロンが合流することにより、あのような大量降雪になったようです。この局地的な低気圧は、現状の高層天気図にはほとんど現れないので、九一年の場合も、現地で天気図を見ているだけでは、悪天の予想ができなかったと察しています。しかし、寒気団のヒマラヤ主脈、インド平原への南下の仕方、その強さで、ネパールから東のチベット、ヒマラヤ地域に与える影響は微妙にちがい、どのようなケースに、この「ヒマラヤ低気圧」が発達するのか、その精確な予測は、現在得られる観測データと数値予報モデルではまだ不可能に近い状況であることも確かです。

したがって、私ができた予測（というより予想）も、チベット高原西に、この「ヒマラヤ低気圧」を引き起こす可能性のある寒気団の南下があるかないか、というところに絞らざるをえず、その意味では、あくまでポテンシャルの予報でしかありませんでした。あとは、現地での気圧、気温の動向や経験に基づく観天望気による判断しかないかと思います（これも、明確なシグナルを与えてくれる保証はないでしょうが）。

結果的には、何のお役にも立たなかっただけでなく、隊員の方々の判断にかえって大きなノイズを与えてしまったようで、後悔しております。しかし、天気予報といった情報も、それに関わるコミュニティの状況と相互作用的であり、予報の流し方も十分考えないといけないということを改めて痛感しました。

そういう意味では、AACKとしては誠に残念な結果になったわけですが、私個人としては、苦いながら、良い経験だったと思って自らを慰めている次第です。

なお、梅里雪山地域を含むヒマラヤ、アッサム、雲南での大雪予測に不可欠な、上記の「ヒマラヤ低気圧」の形成、発達の機構を明らかにすべく、今年から、ネパール気象局の研究者と共同で、より精度の高い地域気象（数値予報）モデルによる研究を開始することにしております。また、ヒマラヤ高地での気象のリアルタイムモニタリングシステムを、環境ODAの一環でなんとか実現したいと、現在、ネパールなどの気象関係者などと進めています。これらの研究やプロジェクトは、梅里で眠る研究仲間の井上治郎のヒマラヤ気象研究の志を継ぎ、発展させることにもなると信じています。

AACK会員諸兄のご理解、ご協力を今後ともお願いしたい次第です。

七、福崎からの回答

ファックスやコメントなどを読んで生じた疑問を福崎に送り、かれからの回答を得た。以下にこれをそのまま収載させていただく。

平井からの質問

一、上の隊員をおろすことに反対、もうすこし様子をみる、という意見がBCであったにもかかわらず、なぜそれが実行されなかったのか。上に予

報をしらせるときにどういう経過でしらせたのか。そのままか？　またはよく吟味した上でか？上の連中が下山を主張したときのBCの反応は？

二．安成の二番目のファックスは、結局どうなったのか。ファックスが着いたときは、すでに下山してきたのか？　もしこれが先にきていたら反応はちがっていたと思うか。

福崎からの回答

一．について。

安成さんの一二月二日付けのファックスは当時BCに居た日本人、Yさん、倉智さん、福崎、読売チームは全員読みました。また中国側にも通訳を通じて伝えられました。（丁度その時中国側との会議がありました。登頂成功時の連絡態勢についてのものです。）その時はどうしようという相談はなされませんでした。各人が、色々意見をいっただけです。

理由は、当時隊の行動は、毎日午後六時からの交信で決定されるのが常でした。登はん隊長の人見はC2におり、統括隊長の松林はC1に居ました。従って当然、二日のその日も各人そのつもりでおりました。

〔上部への安成ファックスの伝達について〕

通常気象情報は毎晩六時からの交信で伝えます。しかしこれは重大と私が判断して、とりあえずC1の松林に伝えることにしました。よく吟味した上ではなく、ほぼそのままの内容を伝えたと思います。松林の反応は、全員BCに一時避難しようというものです。人見は当時、C2のコルからバットレス登はんチームに（望遠鏡を使っての）ルート指示をしていました（または、メイリ上部の偵察に行っていました）。従って直接私から連絡しなかったのですが、無線を傍受したようです。私の記憶では統括隊長だけにまず知らせるという気持ちだったと思います。（ただし他の隊員に確かめなくてはなりません。基本的には午後六時からという気持ちだったと思います。しかし無線は傍受できますから無意味でした。

〔一時下山決定について〕

午後六時からの定期交信でまず安成ファックスの内容を私が各キャンプに伝えました。ほぼファックス通りの内容です。その後人見が交信を始め、全員BC待避をいいました。で後は各キャンプの同意を得る過程になりました。C3のケイハク達も渋々同意し、C1松林も同意し、BCでは私も気象係として同意しました。BCではYさんも同意しました（登はん隊長の判断に従うということのようでした）。ただその時、ケイハクがこれはメイリをあきらめることやで、という趣旨の発言（理由は、一度大雪が降るとルートの修復がかなり大変、ザイルの予備がほとんど無かったのに、更に必要となる、ということらしいです）。また何を持ってBCに下るかという時、人見が余りにも多くの物を降ろそう、テントをつぶそうといったのに対して、Yさんが、再挑戦もあり、テントはそのままでよいというコメントをしました。

ここで注意したいのは、（これは隊の反省会でも出たことですが）、ほとんどこれに関する議論がなかったことです。気象係の立場からいっても、ただ安成ファックスの報告だけで、気象係としてのコメントはしませんでした。その後ディスカッションで気象係としての意見をいうつもりでした。（私の意見は、ひとまず様子を見る、そのために最大安全策の一時BC避難とC2待避、この二つで揺れていました。そして予測として人見はC2待避をいうであろう、というものでした。）今から思うと、隊の反省会でも出ましたが、上部はほぼ確実な気象予報と思ったということらしいです。もちろんそれまでも、気象予報は、日本からの情報と、現地のノアの画像等から現地での判断をしていました。もう一度当時の私の意見を述べますと、安成ファックスははずれるかもしれないが、念のため少なくとも、C2で様子を見るというものでした。最大安全策をとるなら松林が言ったように、BCに待避する、というものでした。隊の進捗状況から、悪天がくる前にアタックというのは無理でした（C3、もしくはC4に取り残される）。当時の数日前からの天気予報は、風はきついが、それほど崩れない、ただし南からの暖湿気流は注意、というものでした。従ってノアの画像を見ながら予報を出していたのですが、このような事情でここ数日は大丈夫という予報は無理でした。また上部及び私が安成ファックスは本当かもしれないと思った根拠に、二日は高層の雲の動きが以前と比べ激しかったこともあると思います。ちなみにシェルパはC1・C3間の荷揚げをしていたのですが、悪天がくるらしいと言うことでBCに降りています。彼らの体力ではBCからすぐC2、場合によってはC3に行くのも可能なようです。

二日の午後六時からの無線によるミーティング

でのYさんの態度は、以前からのように、登はんは任せる、というものでした。Yさん自身は、よく言いますように、気象予報を余り信用していないようです（三国共同チョモランマの例）。倉智さんも自分の方針として登はん活動にタッチしないを貫いていました。しかし二人ともBC待避は慎重すぎると思っていたようです。議論をしても、松林が言ったように、BC待避になったかもしれませんが、ほとんど議論なしということは、反省会で強く指摘されたように、まずいと思っています。気象係としても深く反省するところです。気象係として、ひどい悪天の恐れがあるが、必ず来るわけではない、ということを冷静に言うべきでした。その後、そうしてC2待避ぐらいだったら登れていたかもしれないと、何度も悔やみました。

二、について。

一二月三日付けの安成さんのファックスは、一二月二日のファックスを見てから急遽安成さんに問い合わせた答えです。三日は朝から天気がよかったのですが、既に決定済みということで、上部は皆下山に入っていました。その意味でも決定に影響を及ぼしませんでした。ここで気象係として反省すべきは、安成さんに問い合わせているのだから、ということで、前日二日の晩、決定を延期するよう提案すべきでした。三日は天気は余り崩れないということは予想できました。（ただし私は午後から崩れるかもしれないともいいましたが。）エピソードですが、三日の朝早く張俊が私のテントに来て、天気がよいのだから、決定を取り消せないか、といったのをよく覚えています。

繰り返しますと、安成さんの三日のファックスが来たときは、既に上部はBC下山を開始しておりました。もし決定前だったら、現地判断の重要性ということで、もう少し議論がされていたかもしれません。しかしわかりません。けれど、現地判断ということは当たり前のことで、当日のファックスがなくとも十分議論すべきだった。とにかくBCにいる私等が、冷静に状況を見るべき、そして議論の方向付けをするべきだったと反省しております。

今までの回答をお読みになって、余りにも安易に重大な決定がなされた、とお思いになるかもしれません。確かに私もそう思います。その原因が、前の隊の遭難だったかもしれません。また同時に、まだ時間があり、確かにメイリの高さでは途中全員が休息をとるとしても、BCに滞在する必要はありませんが、別にBCに下って態勢を立て直してもよいという考えも、確かにあったと思います。また前の遭難の大雪の時には、C2もテントが埋められた、ということもあったかもしれません。

とりあえず以上で終わります。客観性を保つためには、誰か他のメンバーにも当時の状況を聞くべきと思います。しかしとりあえず私の記憶ということでご了解下さい。

縮小加速・・

ヒマラヤの氷河とAACK

上田　豊

氷河の縮小

地球温暖化がすすむと、百年後に地球の平均気温が二度程度上昇すると予測されている。これはひとつの目安にはなるが、予測しにくくおそろしいのは、温暖化によって引き起こされる現象の進行がさらに加速され、変化がますます激しくなる場合があることだ。わたしが研究している雪氷圏は、気温次第で雪氷が融けて水になるので、温暖化にはとくに敏感な世界だ。

たとえば、温暖化で積雪や海氷で覆われる面積が減れば、地面や海が日射熱を吸収しやすくなってますます温暖化し、さらに積雪や海氷が減る。シベリアの永久凍土が融けると、温室効果の大きいメタン・ガスが放出されて気温が上がり、凍土の融解を促進して温暖化を加速する。また、氷河が融けると、その氷に含まれていた汚れが、融けたあとの表面にたまり、濃くなった汚れが日射熱をさらに吸収して融解を促進し、氷河の縮小を加速する。

ヒマラヤではモンスーンのため、夏に降雪が多い。温暖化すれば、夏の雪が雨に変わりやすくなり、積雪量や氷河の消長にも関わってくる。欧米の氷河では、もともと寒い冬に雪が多いので、こ

のような影響は少ない。

一九七〇年代から続けてきたわたしたちの観測から、ヒマラヤの氷河の縮小が、最近になって加速している徴候がみられる。気温上昇のため雪が雨に変わる割合が増えれば、氷河に蓄積される雪が減る。同時に、夏の日射熱を大部分反射する新雪が減るための融解促進が重なり、氷河縮小は増幅される（上田）。またヒマラヤの氷河表面には藻類やバクテリアが繁殖し、解け水が多いほど繁殖が進んで汚れ、日射熱の吸収を加速することもわかってきた（幸島）。

さらに、氷河の厚さが減れば、その分表面高度がさがり、気候が変わらなくても氷河は自らより高温な低所の位置を占めることから、薄くなることによる縮小の自己強制現象も指摘されている（門田）。つまり、氷河はいったん縮小を始めると自らその傾向を保ち、周囲の気温が上がると縮小は促進され、それがヒマラヤの場合には、気温変化に敏感でさらに加速される特性があるというわけだ。

地球温暖化により、五十年後には世界の山岳氷河氷量の四分の一が無くなると予測されている。ここに記したように、ヒマラヤでは、それ以上の氷河縮小が起こりうるだろう。さらにその先はどうなっていくだろうか。これは氷河だけがこうむる影響ではなく、氷雪をまとった山岳の、山容全体にかかわる問題でもある。

はるかな高みにまぶしく輝く雄大なヒマラヤ。それがもし、山腹から汚れた氷塊や崩れた地肌に変わっていくとしたら、さみしい。ヒマラヤは荘厳なままの姿で、この地球にあり続けるよう願わずにはいられない。

ＡＡＣＫの衰退

前節だけにしておけばいいものを、ここに蛇足を加えるのは、少し気がひける。意志の無い物と有る者を危険なアナロジーで結びつけるのは良くないと思いながらも、書き進めてみる。

ある集合体に、新たな物（者―以下まとめてモノと書く）の供給が不足してくると、その集合体は老年化し衰退していくのは、明らかだろう。モノの供給不足の原因のひとつは、背景となる環境の変化であり、ＡＡＣＫの場合は、山登りをする若者の減少と、パイオニア・ワークの領域の減少が重なっている。

これらは次元がいくらか違うが、いずれも人為的な環境変化である点で現在の地球環境問題と少し似ている。しかし、その原因を是正できる可能性の面では、地球環境問題の方が、まだ道がありうるように思われる。やっかいなのは、意志のある者の場合はたとえ環境が整えられたとしても、集合体への参入を拒絶できる点である。降る雪は重力で落ちるべき所に落ちつくが、人はいったん衰退を始め魅力のうすれてきたところを避けて通ることができる。

つまり、氷河の縮小加速の原因は主にモノの支出の方にあるが、ＡＡＣＫの衰退は、モノの供給面で加速化する運命にある。いずれが原因にせよ、いったん大きな流れのなかでマイナスの方向に加速化したものを、元に引き戻すのは無理がある。手ごろな未踏峰に登ることは、まだわたしには魅力だが、手っとりばやい実現の方法は他にある。

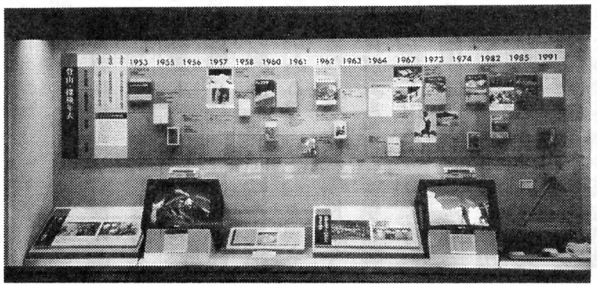
元に戻すのが無理なら違う方向にという手、たとえば新しくはないが、ＡＡＣＫの頭のＡ、学術を鮮明に打ち出すことができるだろうか。前節で紹介した山と最も緊密な氷河研究に関わってきたグループには、ＡＡＣＫ会員と京大山岳部ＯＢが、二〇人ちかくいる。だがこれは、山の経験と伝統のバックグラウンドを役立て生かしたものであっても、これらの組織の活動として行われたわけではない。むしろグループの中で徒党的な色合いを出すのは、できるだけ避けてきた。いろんな大学・背景・分野の研究者たちと協調して成果をあげるには、出身の看板は目立たない方がよいのである。ちなみに、氷河研究の若い力となっている京大山岳部ＯＢは、誰もＡＡＣＫに入っていない。

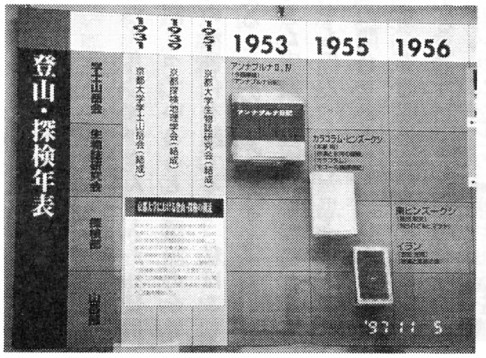
さてそれなら、と論述を進めるのがこの稿の目的ではない。話をもとに戻して、氷河の場合はモノの出入りのほかに熱の収支が氷河質量の支出を規定しているが、人間の集合体の場合は、お金の収支が組織の活性度の目安になろう。ＡＡＣＫの不思議なところは、会費が今より一桁安かったころが、もっとも活性度が高かったことである。現在のアンバランスは、いったい何なのだろうか。

京大の登山・探検の歴史と伝統は、わたしにとって、かけがえのないものである。これは、人間のつながりに関わるものだが、それは組織という形でしか維持できないものでもあるまい。ＡＡＣＫは、梅里雪山の経験をへても変わり得なかった。変わらないままであることは、衰退加速の流れに身をまかせていること。その営みはやがて消えても、かつて残したものは消えない。新しい営みは、新しい母体から起こればよい。ただヒマラヤの山容は、いつまでもそのままであって欲しい。

京大百周年記念展

10月28日～11月24日に京都大学総合博物館で開催された創立百周年記念展覧会の「登山・探検とフィールド調査」コーナーに、AACKは、道具・書籍・ビデオなどの資料を提供した。（新井浩氏撮影）





これからの山登り
―AACKの今後に向けて―

今井一郎

私が京大山岳部に入部した時（七四年）から既に山岳雑誌上などで大学山岳部の凋落が指摘され、その一方で社会人山岳会の隆盛が際立っていた。一部の大学山岳部では閉鎖的な階級主義が保持されている、と伝えられ、社会からは特異な存在として捉えられることがあった。

しかし、ルームでは度重なる遭難（北又、槍平、K12など）によって多くの人材を失いながらも三〇人以上の現役部員が留まり、山登りへの情熱を燃やし続けた。様々の理由が重なって、ルーム全体が一丸となって目標に突き進むことは出来なかったが、部員たちが多様な個性を相互に尊重しながら、辛うじて山岳部という組織が保たれていたのではあるまいか。

その後、大学山岳部の凋落傾向は今に至るまで全国的に引き続いている。私が勤めている大学の山岳部はネパール・ヒマラヤ、カラコルムなどへの遠征で立派な実績を残しているが、五年ほど前には部員が一名だけになってしまった。OBたちの努力によって、現在は数名程度にまで回復したそうだ。

最近は登山者の高齢化と女性登山者の増加がマスコミなどで指摘されている。九〇年頃から中高年者向け山岳書（テキスト、コースガイド、エッセイなど）が数多く出版されている。中高年・女性の遭難者が増えて、マスコミでも頻繁に取り上げられている。私は、九五年の七月末に講座の学生たちの協力を得て白神岳山頂で登山者の実態を調査し、そこでも中高年・女性登山者の占める率が非常に高いという事実を痛感したのである。現在は中高年者と女性が日本における登山活動を構成する主要な要素になっている、と言えそうである。この現象は当初「中高年、女性登山ブーム」と言われていたが、もはや一時的な「ブーム」ということはできない。

山の中で人々が直面する肉体的、精神的な困難は、性・年齢などが斟酌されることなく誰にでも同程度に降り懸かってくる。人はそれらに対し自らの体力、精神力および経験などを駆使しつつ立ち向かい、切り抜けて行かねばならない。山登りは女性や既に肉体的な峠を過ぎた人にとって厳しい活動になるはずである。しかし、近年は登山用具、衣服などの改良が進み、交通網や登山道が整備されて行動の効率化が可能になり、中高年者、女性たちの活動範囲が広がってきた。行政も「生涯学習、スポーツ」等の語を定着させるなどして彼らの活動を促している。あるアンケート調査によれば、高齢者が「生きがい」と感じる内容は「旅行や外出」が最も多かった、と言う。彼らは自らの力によって危険と困難（試練）を乗り越えた時に初めて味わうことのできる達成感を求めて、山（自然）に向かうのであろう。このように、現在は、日本の高度経済成長期の担い手とその子供たちの世代および彼らの伴侶たちによって登山、旅行などが楽しまれている時代なのである。今後、日本社会における高齢化の進行に伴い、中

高年、女性による登山活動が定着するのは間違いあるまい。これからは「中高年者」と「女性」のスポーツとして登山活動を位置づける必要がある。また、山岳遭難において中高年者、女性の占める比率が高まっていること、他の登山客に対するマナーや環境保護に対する基本的な配慮を欠いた登山者の増加などが問題視されている。中高年・女性登山者に対する負の評価も同時に高まっていることに注意する必要がある。

私はこれらの現状を踏まえた上でAACKの今後について議論を進める必要がある、と思う。前号（No. 9）で上尾会長は、京大山岳部員を若手登攀者として養成して登山活動の活性化を図り、AACKの本来の目的であるヒマラヤ未登峰の初登頂を実現しよう、と提案されている。部員を英才教育しよう、という案である。若者の多くが登山を魅力ある活動とみなさない、という厳しい現実はあるが、京大山岳部の充実発展へ協力することはAACKにとって今後の重要な課題といえるだろう。

しかし、これまでAACKが歩んできた初登頂路線がすでに行き詰まっていることは議論の余地がない。AACKの活性化を論ずる時、私はこれまでの方針を変えることの是非を論ずるよりも、AACKが培ってきた実績を社会の中でこれまで以上に生かす方向をも探るべきだと思う。人間社会と自然（山）との関わりのあり方（登山文化とも言える）を追求し、その成果を一般社会に向けて積極的に発信することに一層力を注ぐのである。講演会、シンポジウムなどの開催や出版を積極的に企画するのだ。笹ヶ峯ヒュッテその他を利用して自然との「戯れ」を試みてもよい。AACKが実践してきた山（自然）とのつき合い方に触れることは、日本社会における登山行動の主たる担い手たち（中高年者と女性）にとって有益であろうし、それを材料に議論も深まるだろう。登山者の高齢化に伴って生ずる諸問題の解決に向けて彼らの間に共感を得る素地も出来上がっている、と思われる。ただ、AACKに女性会員が極度に少ない事が問題であろうが…！？

AACKの今後のあり方について、本誌では様々な立場から意見が提出されて興味深く拝見させて頂いている。私自身は卒部以来ほとんど登山活動から遠ざかっている（昨年はケニア山に登ってみたが…）。とはいえ、このところ白神山地周辺で自然と人の関わりに注目して調べていることもあり、私見を述べさせて頂いた。ご批判を賜れば幸いである。

AACK人物抄

高橋健治さん

―その5（最終回）―

斎藤清明

AACK創設に刺激になった、高橋さんのドイツ留学中のアルプスでの行動の一端は、前回触れた（まる二年間の滞欧生活中の山行は、細野重雄さんの「高橋さんの山」（『岳人』第八号）の年譜にある）。もっと詳しく調べたいと思っているが、まだ手についていない。それでも、AACK国際登山探検文献センターに保管されている、高橋さんが持ち帰った本場アルプスの地図を見ていると、その行動ぶりがほうふつさせられる。

この地図類は、私が現役時代には京大山岳部ルームにあったように思うが、たしかにAACKで保管するほうがいいだろう。なお、高橋夫人のローゼさんから、高橋さんやローゼさん撮影の写真類を預かっているが、これらもAACKにまとめておくべきものだと思う。

さて、高橋さんは昭和二二年（一九四七）一二月二七日、京都北白川のお宅で亡くなった。四四歳だった。戦争末期ごろから結核を発病し、闘病生活を余儀なくされた末のことだった。実家は裕福な商家だが、外国人を妻にしたというので離縁状態で、職もなく、戦後の苦しい時期だったという。「病院はいや。家にいたいというのですが、食べるものもなくて。農学部の友人が牛乳を持ってきてくれたのがうれしかった。亡くなるまでずっと」と、ローゼさんは語る。ひとり娘のナミさんは病気がうつってはいけないというので離され、見取る人も少ない最期だったという。

高橋さんを追悼する一文が、冒頭に紹介した『岳人』第八号の細野重雄「高橋さんの山」である。三高・京大の仲間だった細野さんは、追悼文のほか高橋さんの登山歴も作製している。「作製

にあたり、京大山岳部ルームの消失その他のため、主として山仲間の記憶によった箇所が多い」と記しているが、たいへんな労作だ。合作した仲間として今西錦司、陸田菊太郎、奥貞雄、平吉功の名をあげている。

高橋さん自身の最後の文章は、『岳人』第二号（昭和二二年）に掲載された「思出の登攀より得たもの」だろう（これは、平井一正さんから指摘された）。

「過去二十数年間登山に大部分の暇を使って来た私は、いつのまにか思出多き登攀の数々を重ねて、その間私にはつまらぬ登攀と見えるものばかりであるが、私が私の心に反省してこれらを思出して見るとき、私のなしたすべての登攀が、現在の私を造り上げてくれたまことに尊い登攀であったことをつくづく感ずる」

「私はこれらの登攀から、私にとって真に貴重なるものを獲得した。それは『自然』即ち『山』は正直であるというすこぶる簡単なことで分り切ったことであるが、これを身にしみて体得し、これに絶対の信を置いてすべての人生行為に出発せんと努力する様になり、又これを一日一日と進歩して実行し得る様になったことである」

「過去の登攀の数々は、簡単ではあるが訓練と試練を委する以上の態度実行を私に与えてくれた。私は過去の登攀の思出として、自らの失敗をいましめ反省すると同時に、現在に於て沈黙之を日々実行に努力し、自己の力及ぶ限りの創造に勤勉である。そして現在より将来を警告して、未来の彼岸、斯くあるべきものにして、斯くあらばやと欲する境地に到達すべく一歩一歩の将来の登攀を企画しなければならぬ」

以上は抜粋だが、この文章からも、登山に人生に真摯であった高橋さんの姿をかいま見る思いがする。それだけに、戦後まもなくの早逝は惜しまれてならない。AACKがマナスル計画など、ヒマラヤに向けて動き出すのは、高橋さんが亡くなった直後のことである。本場アルプスで登攀に励み、新装備を京都の仲間に送ってきていた高橋さんは、ついにヒマラヤを見ることはなかった。

これで、高橋健治さんについてのメモをひとまず終えたい。手元には、樺太の森林調査のドイツ語論文など、いくつか触れたい資料があるのだが、また機会をみつけたい。

なお、ローゼさんは二十一歳で来日以来、高橋さん亡き後もずっと日本住まい。法政などでの語学教師、非営利団体「モア・ジョイ」の主宰、『北越雪譜』の翻訳など、国際交流に尽くしてきたが、寄る年波もあって、「私が亡くなると、健治さんの資料もなにもかも、燃やされてしまうからね。整理をしておかないと」と、寂しげだ。また、娘のナミ（エリザベス）さんは在米。（終）

妙高山外輪、三田原山の雪崩について

横山宏太郎

一・はじめに

妙高山は新潟県南西部、長野県境の近くにそびえる二重式火山で、標高は二四五四メートル、越後の名峰の一つに数えられる。外輪山は神奈山（かんなやま）、大倉山、三田原山、赤倉山が東に向かって開いた馬蹄形をなし、その中に中央火口丘（本峰）と、尾根続きになっている外輪山の一部、前山がある。火口原の水は北は大田切川、南は白田切川となって流下し、関川に合流する。本峰の南に位置する三田原山の南面、一三〇〇メートルには笹ケ峰京大ヒュッテがあり、本会会員の多くにとってはなじみの深いところである。妙高山の山麓には温泉とスキー場が多く、関温泉のように日本のスキー草創期からのゲレンデもあり、スキーリゾート地としての知名度が高い。そのなかでは最後発のスキー場が妙高国際スキー場と、それに隣接して作られた杉の原スキー場である。この二つは事実上一つのスキー場といってよいであろう。ここの売り物は、妙高国際の広大な初・中級者向けスロープ、変化に富みゴンドラを備え輸送力に優れた杉の原、そして最近架設された第3高速リフトにより、標高一八五〇メートルまでゲレンデが広がったこと、それにより五月上旬までスキーが可能になったことである。

その三田原山の斜面で、一九九六年三月一六日、

雪崩が発生し、登山者（酒井正裕氏、山スキー同志会、単独行、山スキー使用）が一人埋められたが、付近にいた他のパーティーにけがもなく救出された。私は、平井一正さんから『岳人』の記事(1)を見せていただき、この事故について知った。平井さんのおすすめもあり、近くに住んでたびたび現場を眺めていたことでもあるので、気のついたことを記してみたい。ただし、私が最後に現場を訪れてから数年が経っており、記憶の誤りなどもあるかもしれないことをお断りしておくとともに、お気づきの点は指摘をお願いしたい。

二．現場について

三田原山の斜面というと、私は京大ヒュッテの背後の広大な斜面を思い浮かべてしまうが、この記事(1)では「シブタミ川源頭近くの三田原山側（右岸）の斜面」をこう呼んでいる。しかし地形図をよく見ると、たしかに沢の源頭近くではあるが、これはシブタミ川ではなく、池ノ峰の北東から外輪の斜面に切れ込んでいく沢である（二五〇〇分の一地形図では名前は記載されていない）。この沢はかなり急な谷壁を持つが一九〇〇メートル付近はやや開けており、横断して右岸の斜面にとりつくことができる。妙高国際スキー場最上部に最近新設された「第3高速リフト」の終点付近からは、三田原山方面へのルートとしてまことに都合よく見える斜面である。斜面は下部は緩やかだが、上部ほど傾斜が急になる。

私がこの記事(1)に接してまず思ったのは、「やっぱり出たか」ということであった。私は、今回雪崩の起きた斜面については、「最近ではかなりの人がルートとして使っているようだが、傾斜から考えると雪崩の発生する可能性が充分ある。雪の状態によっては危ないのではないか。事故が起きなければよいが」と考えていた。この斜面をほかの人はどのように考えていたのだろうか。酒井氏は、「通常ルートのまさかこんなところで」と考えていた(1)ため、雪崩の危険を感じながら回避する行動はとらなかった。蟹江健一氏は、「雪崩れないのだという固定観念を持っていた」とのことである(1)。中田良一氏によるルート解説記事(2)のうち、この斜面に関する部分には、特に雪崩についての記述はない。築田（つくだ）博氏は、ツアースキーコースを紹介するなかで「雪崩の危険あり、要注意箇所」としている(3)。以上の各氏はいずれもこのこの地域には精通している人達であるが、認識は様々である。

三．事故の概要

さて、前掲の記事(1)によって事故の状況を簡単に振り返っておこう。ただし「シブタミ川」については先に述べた通りであるが、ここでは原文のままとする。

酒井氏は妙高国際スキー場の第3高速リフト終点から三田原山を経由して、濁又川と神奈山北面を滑る計画のもとに、三月一六日早朝妙高高原駅着、仮眠後バスでスキー場へ、そして八時四〇分頃にはリフトを降りた。八時五〇分行動開始、まずシブタミ川左岸を登り、川に突き当たったところでなるべく水平にトラバースして対岸にわたり、ダケカンバの疎林の斜面にとりつく。上部に見えた雪庇を避けるためやや左側にルートをとり、傾斜三〇度ほどの急斜面をジグザグに登る。九時二〇分頃（または三〇分頃）いよいよ支稜線にたどり着くと思ったとき、急に足元がすくわれて転んでしまった。すぐに雪崩に巻き込まれたと気づいた。停止したときは顔面と左腕が雪面にでていたが、あとから流れてきた雪で顔面は一〇～一五センチメートル覆われた。左手が雪からでていたので、顔を覆った雪は取り除くことができたが、体はほとんど動かず、自力脱出はあきらめた。約一〇分後に、近くにいたパーティー（岳人取材班ほか）により救出された。

四．なぜ事故に至ったか

この雪崩事故の発生は、直接的には、不安定な雪面に登山者が入ったことによるのは論をまたない。岳人の記述(1)によれば、酒井氏は相当の経験を有し、またこの山域にも精通していたらしい。そのような人でも、危険な雪面に入り込み、雪崩を起こし、事故に遭っている。しかも、何度も雪崩の危険を感じながらである。その経過は次の通りである。まずリフトを降りたところで、乾燥した雪が四〇センチメートルほど積もっていた、予想以上の降雪量であり、雪崩れやすい状況にあると思いつつ、行動を開始した。また、斜面を登っている途中で、スキーで雪面を切ったときに二、三度雪が動く兆候が見られた。やはり雪の状態が悪いことを再認識したが、斜面への注意は散漫になっていた。酒井氏は登行を続け、雪崩に遭遇する。こうして書いてみると、なぜ雪崩を回避する行動をとらなかったのか、信じられない。いったいなにがそうさせたのか。一つには、当日の天気

の良さがあると考える。天候がよく、山々の眺めもすばらしい。そんな日には登山者として気分が悪かろうはずがない。しかしそれが細心の注意を払うことを怠らせる。我が身を振り返れば、この可能性は否定できない。また、当日現場にいた二人の方の感想として、「たとえ危ないと思っても、こんないい天気の中で登らずに引き返す勇気を持てるだろうか?」とある(1)。もう一つ、慣れ親しんだルートであること。これも注意を散漫にする、落とし穴の一つであろう。慣れたところでは、すべてがわかったような気持ちになることもあるかもしれない。しかし個人の知りうることは自然の複雑さに比べればほんの一部にしかすぎないのではないか。

リフトが延びたことも考えておく必要がある。延びてしまったリフトは利用して、行動に時間的な余裕を得ようとするのは当然であろう。それは安全につながる一面を持っているが、その一方で、ルートの選択についてはこの場合、逆の効果をもたらしたように思う。まずリフトが延びた故にこの計画をし、このルートをとることになったともいえるのではないか。リフトが延びる以前であれば、酒井氏の計画はこれと違ったものになったかもしれない。また、いったん獲得した高度を失うのは非常にもったいない、下ってから登り返すようなことはできれば避けたいと感じるのがふつうだろう。そのことが、選択肢を少なくしてしまったのではないか。

築田氏は前出の記事(3)の中で第3高速リフト運休時の代替ルートについてふれている。ゲレンデの下部を登って、一六二〇メートル付近で沢を渡り、外輪の稜線へ向かって登るものである。私は、池の峰付近からほぼまっすぐ稜線へ向かって登るルートを何度か登った。上部では築田氏のルートと同じになるが、下部のアプローチでは築田氏のルートが便利であろう。

酒井氏の文(1)によれば、(1)「通常ルートのまさかこんなところで」、(2)「まだ山行の開始間際であり」、加えて(3)「誰もが通過する場所であるため」、危険を感じながらも「こんなところで雪崩に遭うとは考えてもいなかった」。いずれも雪崩の発生に関わる積雪の状態や斜面の形状、状況とは関係のないことである。(1)と(3)は意味がありそうで、実はない。これまで大勢の人が(安全に)通過したとしても、「その時は雪崩が起きなかった」ということに過ぎない。その時の雪の状態や気象状況はどうだったのかを含めて評価してはじめて意味がある。たとえそうしても経験則には限界があり、外挿には危険性がともなうのだが。今、雪崩が発生するかどうかは、今その瞬間の状況にかかっているのである。しかし酒井氏は、それとは無関係のことを理由として、「今、ここでは雪崩には遭わない」と思っていた。詰まるところ、根拠のない思い込みが状況判断を誤らせ、せっかく雪崩の兆候をつかみながら、それを有効な回避行動に結びつけることを妨げたといえるのではないだろうか。

五. おわりに

この雪崩について考えることにより、たいへん勉強になった。この文は酒井氏への批判ではなく、自分自身の反省である。これまで何度か危険な目に遭った経験は、これと同様の根拠のない思い込みと、自分で認識していない無知とからであることが、この事故について考えているうちによくわかった。

最近、安全と危険について考えていたのは次のようなことである(4)。安全のためには、危険がたくさんあること、加えて自分の知らない危険も多いことを認識し、それをなるべく知る努力をしながら、さらに未知の危険に対処できる余裕を持つことではないか。私はその考えを再確認し、さらに根拠のない思い込みの危険を知ることができた。今後の自分の行動に役立てていきたいと思う。

最後に、この稿をまとめるのが遅くなったことをお詫びするとともに、よい機会を与えてくださった平井さんにお礼申し上げます。

文献

(1)『岳人』一九九六年六月号、pp.83～88
(2)『岳人』一九九六年三月号、pp.26～27
(3)『山と渓谷』一九九七年4月号、pp.234～240
(4)『報告』第一七号、京都大学山岳部（一九九四）pp.230～231

仮ホームページのご案内

インターネットにＡＡＣＫのホームページを作る計画は、前号の上尾会長の就任挨拶に触れられていましたが、現在試作品を作成中の原田道雄理事から説明していただきました。

・　・　・　・　・

使い方　まずインターネットに接続してhttp://www.from.co.jp/aack/で
ＡＡＣＫ仮ホームページに入ります。すると次のような画面になります。

AACK仮ホームページ
あなたはこのページの <画像>人目のご訪問者です。

ご案内
この度ＡＡＣＫのＵＲＬを獲得しました。このホームページはhttp://www.aack.or.jpが立ち上がるまでの仮の住まいになります。お役に立てる良いホームページを作るために、皆さんの積極的なご意見・ご感想をお待ちしています。

What's New!!
AACK AACKのﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞにようこそ
AACKのご案内(準備中)
History AACKの歴史 (準備中)
会員ページ

リンク
ここで会員ページをクリックしますと
次の画面になります。

SEE
AACK伝言板
連絡用伝言板です。報告や連絡事項をご自由にお書き込みください。

ATTENTION
山行案内（準備中）
山行の計画のある人は、お書き込みください。
ART 皆さんが投稿した山の写真 （準備中）
E-mail メンバーの一覧 （準備中）
ここでAACK伝言板をクリックしますと
次のページに移ります。

京都大学学士山岳会　伝言板

名　前：　　E-Mail：
タイトル：
内　容：

かっこ内に入力して下にある送信を押しますと伝言板に記載されます。ただしE-Mailは入力しなくても送信できますが、入れておくと返事を送る人には便利です。既に何人もの人から書き込まれています。古いものも下の方に残っていますので見ておいてください。

まだ試作品で準備中が多いのですが、準備でき次第逐次追加して行きます。
文字で書くと以上のようになりますが、現物はカラフルです。是非一度アクセスして、感想を送ってください。

原田道雄

編集後記

この号は昨年の梅里雪山遠征隊の気象関係の分析、ＡＡＣＫについての見解と提言、妙高外輪のスキーヤー雪崩事件、高橋健治伝最終回など、多彩な内容になった。ＡＡＣＫの現状と将来については、今後もどんどん多種多様の意見が寄せられることを切望している。

インターネットのホームページ開設計画については、推進者の原田さんの苦心の作をご披露したいので、アクセスしてください。同好の士は多い筈なので、衆知を集めて誇るに足る自信作を創り上げてください。

スペースの都合で次号回しになる場合も起こりうるが、投稿はいかなる種類のものであれ、歓迎する。次は一月二十日が締め切り。

（酒井記）

編集委員　平井一正、酒井敏明
　　薬師義美
発行日　一九九七年十一月三〇日
発行所　京都大学学士山岳会
　　京都市左京区北白川追分町
　　京都大学大学院農学研究科
　　地域環境科学専攻
　　清水　浩　気付
製　作　京都市北区小山西花池町
　　一一八
　　（株）土倉事務所